様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ９ 日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２５２０５８２

研究課題名（和文）談話構築プロセスと学習環境要因の関連性：社会文化的観点からの考察

研究課題名（英文）The effect of learning environment on L2 discourse co-construction processes: Socioc ultural perspective

研究代表者
中浜　優子（Nakahama, Yuko）

慶應義塾大学・環境情報学部・教授

研究者番号：５０３４３２１５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,100,000円、（間接経費）　930,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は，英語学習者の学習環境の違いがストーリー構成に及ぼす影響を包括的に捉えることである．ESL/EFL学習者が英語話者との会話の中でストーリーテリングを行ったところ，トピック言及の指標である冠詞や代名詞については学習環境に拘わらず不適切な使用が見られた一方，EFL学習者が独話調であったのに対し，ESL学習者は談話標識等を駆使し，対話者と協働的にストーリー展開を試みる等，異なる傾向が表出された．本研究により，外国語教育における語用論的知識の教授の必要性が示唆され，母語にない言語形式は，ESL環境での肯定的証拠の豊富さにも拘わらず，誤用として定着するという言語転移の特質も明らかになった．

研究成果の概要（英文）：The study investigated the effect of learning environment on L2 story telling proc esses.  High intermediate level EFL and ESL learners whose L1 is Japanese narrated stories within conversa tion with English native speakers. The results revealed that 1) irrespective of learning environment, inap propriate use of articles and pronouns were found in learner narratives, and 2) EFL and ESL learners displ ayed differing patterns in telling stories. Specifically, the EFL learners tended to tell monologic narrat ives, whereas the ESL learners were inclined to involve their native speaker interlocutors using discourse  markers such as 'you know'and 'okay'.
  The research demonstrated persistent difficulty with the use of linguistic forms that do not exist in le arners' L1 system despite abundant positive evidence ESL environment provides. Moreover, the study implied  the importance of providing pedagogical intervention to teach pragmatics such as discourse markers and in teractional strategies.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：社会文化理論　談話構築プロセス　学習環境　ナラティブ　第二言語習得　英語習得

## １．研究開始当初の背景

（１）1990 年以降の第二言語習得（SLA）研究領域では，「実社会における言語使用」の重要性の更なる認識が深まり，言語運用能力の促進に関する研究が進歩発展を遂げてきている．その中でも，文脈内での言語の形式と機能のマッピングに着目した機能主義的アプローチ(FA) や，社会の中での対話者間のやりとりを重視した，Vigotsky (1978)の思想から生まれた社会文化理論 (SCT) は，言語使用に焦点を置いた SLA 理論を代表するものの一つであると言える．

FA の枠組みで，名詞句・照応詞などの適切な使用が談話の一貫性に大きく影響する事が分かっているが，それらの習得研究は中浜（2011）を含む一連の先行研究において，モノローグデータが分析されることが多く，産出された言語のみに焦点が当てられており，プロダクト産出までに至るプロセスは，未開拓の領域である（Mitchell & Myles, 2013). また, 従来の研究で用いられてきた無声映画や絵本の語り等のデータ抽出法は，我々が日々直面する実際の言語使用経験とは類を異にするものである．そこで，本研究では，実際の会話の中で起こりうるストーリーテリングに着目し,プロダクトはもとより，話し手と聞き手との「関わり(engagement)」と物語談話構成との関連性，すなわち学習者言語産出までの “プロセス”を詳しく分析することを試み，FA 及び SCT 研究領域での貢献を図る．

（２）English as a second language (ESL) 環境の学習者は English as a foreign language (EFL) 環境で学んだ学習者に比べ，語用論的能力発達の速度が早く，語用論的誤用に対する意識が高いとの報告がなされている（Bardovi-Harlig & Dörnyei, 1998; Schauer, 2006; Matsumura, 2003 等）．しかし，留学等により，ESL 環境で学習するという事が語用論的能力習得の成功に繋がる「万能薬」とは一概には言えず，習得対象となる項目によっても，学習環境の及ぼす影響は異なり，学習環境要因がSLA に与える影響の複雑性も議論されている（Taguchi, 2008）．しかし，目標言語圏での生活の長さが話者の社会的概念(ここでは“プライバシー”の概念) に影響を及ぼし，それがナラティブの談話構成にも反映されるという研究報告（Pavlenko, 1996）もあり，学習環境要因は，言語と思考が交差し，談話を構築していく上で重要な因子となりうるのが分かる．また，研究ごとに研究対象者の学習環境要因は様々で，研究結果の比較を困難にしていることからも，学習環境要因を本研究の変数として取り上げることにした．

## ２．研究の目的

本研究の目的は，文脈内での“言語運用”に着目した第二言語習得理論である FA，及び SCT のアプローチを採り，英語学習者の学習環境（ESL/ EFL）の違いが,ナラティブ談話構成に及ぼす影響を包括的に捉えることである．特に，従来の FA の談話の一貫性についての研究では，産出された言語の分析に重点が置かれてきたのに対し，本研究では，プロダクトはもちろんのこと，言語産出に至るまでの対話者間でのやりとり（プロセス）に着眼し，それを学習環境の違いという切り口から探求することで，英語習得研究，ひいては SLA 分野全般への貢献を図るものである．

研究設問

（１）学習環境の違いは，英語学習者のナラティブ内のトピックの連続性・非連続性の指標表出に影響を及ぼすのか．

（２）ナラティブを構築するプロセスのにおいて，ESL と EFL の学習者では違いは見られるか．

（3）学習者と母語話者間で不理解が生じた際，その修復にどのような方略が使われるのか.

## 3．研究の方法

日本語を母語とする英語中上級レベル（TOEFL スコアー480～525 点）の学習者10 名に英語母語話者と 15 分程度の会話をしてもらい，その話の流れの中で，被験者間で統一したテーマで経験談を語ってもらった．学習者とほぼ同じ年齢層の英語母語話者に対話相手を務めてもらい，出来るだけ自然に会話を行い，その中でタイミングを見て，各人に，今までの人生の中で最も嬉しく幸せに感じた事と，最も怖かった・嫌な思いをしたことについてそれぞれ語ってもらうという設定をした.

会話は全て録音し，データは文字化し，会話の中のストーリー部分（導入・展開・終結まで）を，談話一貫性に関連する言語項目である指示対象（名詞句・照応詞）と談話標識を中心に分析した．従来のモノローグの研究とは異なり，英語母語話者及び英語学習者双方に，必要に応じインタラクションを行ってもらうことから，意味交渉が起こることが予測されるので，その種類，きっかけとなった発話，次の発話との繋がり等から分析し，ストーリー展開に関わるインタラクションのプロセスも詳しく考察した．また，発話者の内在化された思考を理解するために，データ収集後，アンケート調査だけではなく，再生刺激法を用い，学習者から内省データも一部収集した.

## 4．研究成果

(1) トピックの連続性・非連続性の適切な表示が，ストーリーの結束性ひいては一貫性に重大な役割を果たすと言われている．そこで，トピックの連続性の指標として，新情報，旧情報，現在のトピックの 3 つの文脈において，ストーリーに登場する人物の言及がどのように表されているかを調べた.

その結果，ESL/EFL 環境に拘わらず，冠詞の正用が定着しておらず，また，不適切なコンテクストで（現在のトピックではなく，旧知情報として）いきなり代名詞を使用する傾向があることも分かった．このことから，言語使用によるトピック連続性・非連続性の表出は中上級レベルの日本語を母語とする英語学習者では，学習者の学習環境に拘わらず，習得が不完全である事が窺える．代名詞の不適切な文脈での多用は，先行研究でも報告されており(e.g., Chaudron and Parker, 1990; Nakahama, 2012)，英語を日常的に使う学習者にとっても適切な使用は困難であることがこの結果から明らかになった．この事から，日本語にない冠詞や，通常日本語の話し言葉では使用しない代名詞の使用については，いくら ESL 環境下で，それらの肯定的証拠を日常生活において洪水のように浴びても，正確な使用には繋がらないことから，母語にない名詞のマーキングシステムは化石化し，習得が非常に困難なのではないかと推測される.

（2）英語母語話者を対話相手にし，ESL 環境の学習者と EFL 環境の学習者がストーリーを構築していくプロセスについて，相違点がいくつか認められた．まず，EFL 環境の学習者の発話は短く，母語話者である対話者が質問をしたり，発話を拡張させるような傾向が見られた．また，L1 である日本語の使用がところどころ見られ，英語の語彙を思いつかない場合など，日本語の知識を多少持ち合わせる英語母語話者に質問する等の助けを求めるエピソードが見られた．その他の EFL 環境での学習者の特徴的傾向としては，モノローグ調のストーリーテリングが続き，それに関する母語話者の短い質問があり，それに yes か no で短く答える，というシーケンスが何度か続いた.

それに比べ，ESL 環境の学習者のストーリーテリングは各アタランスが長く，またそれに対しコメントをする母語話者の質問やコメントも単調なものではなく，母語話者自身の体験も述べたり，学習者のモノローグから母語話者とのダイアローグに発展していた．

最も顕著な違いとしては，EFL 環境の学習者の多くが,目標言語（英語）の権威者として，対話者である英語母語話者に英語の語彙等について，質問を頻繁にしたのに対し，ESL 環境の学習者は，対話者の英語母語話者に同調・同意を求めるような感じで，積極的に「会話」の形へと発展させる傾向があった点である．その際，'you know' や 'ok'等の談話標識を多用する傾向があり，それは ESL 学習者と対話した母語話者にも同様に多々見受けられた．'You know' の使用箇所を見てみたところ，学習者と対話相手の英語母語話者の円滑なコミュニケーションを保持するために使用されているのが分かった．

なお，EFL 学習者においても頻繁に使用される談話標識もあった．具体的な例を挙げると，'oh'に関しては，ESL, EFL 学習者双方に使用されていた．しかし，その使用方法については，2 グループ間の話者で，その方法に相違が見られた．ESL 学習者は自らのターンをとり，そのままアタランスを続けるために 'oh'を使用する傾向が見られたのに対し，EFL 学習者は，母語話者のアタランスに対して，'oh'と驚きの反応をする際に使用し，そのままアタランスを継続することなく，母語話者にターンを譲るという傾向が見られた．

（3）学習者と母語話者間に不理解が生じた場合の修復の際も，ESL と EFL 環境の学習者で違いが見られた．双方とも，不理解が生じた際は，確認チェックや明確化要求がよく見られたのであるが，特に，EFL 学習者の誤用に対し，母語話者側からのリキャストが頻繁に確認されたのに対し，ESL 学習者の誤用に対してはリキャストがほとんどなされなかったのが特徴的であった．これは，学習者が母語話者に頻繁に語彙などについて質問をするという発話のパターンを採用したために，母語話者としても，その言語の権威者として学習者の英語学習を手助けしようという意識が働いたのかもしれない．それに対し，母語話者に助けを求めない ESL 学習者に対し，英語母語話者はリキャストをする必要性を感じなかったために，リキャストが使用されなかった可能性もあると考える．

本研究では，従来の FA アプローチが産出されたプロダクトのみに着目され，対話者とのインタラクションなどが見過ごされて来たという背景（Mitchell & Myles, 2013）の中，如何に学習者が結束性の高い，相手にとって分かりやすいストーリーテリングをするのか，というプロセスを，トピックのマーキング及び，母語話者と学習者のインタラクションを談話標識使用，会話のシーケンス，意味交渉・訂正フィードバックの使用という切り口から探った．

学習者環境要因と第二言語運用能力の関連性いついては，トピックをマーキングする言語形式の使用については，学習者環境の違いは顕著には影響しないことが分かり，冠詞や代名詞使用については，肯定的証拠が豊富にある第二言語習得環境でも，大きなメリットはないようである．

しかし，第二言語習得の環境に身をおいて学習した話者の方が，外国語としての英語を学習した者よりも，ストーリー構築において，より対話者を巻き込み，まるでダイアローグのようなストーリー構築のパターンを提示する傾向を見せたのが，本研究の最もインパクトのある結果と言える．それは，相手に同意を求める，'you know' などの談話標識の適切な使用にも表れたのであるが，後のインタビューでは EFL 環境で英語を学習した参加

者は，ESL の学習者と同じ TOEFL スコアーのレベルであったにも拘わらず，これらの談話標識に関する知識を持ち合わせておらず，その結果当然使用したことがないのが大半であった．これらを頻出する事がよいコミュニケーターであるとは勿論言えないのであるが，対話相手と協働的に話を進めて行くという行為はより円滑なコミュニケーションに繋がるのは明らかである．

一般的には，ストーリーテリングをする際は対話者がいるのが通常であり，自身の楽しかった感情や恐怖を感じた心情など，ヴィヴィッドに相手に伝えるためには，単調なモノローグではなく，ダイアローグ調のストーリーテリングがより効果的であると言える．

本研究により，協働的なストーリーテリングの一指標を提示出来たのではないかと考え，また，学習者自身による，「よりよいストーリーテリングとは何か」という意識の高揚そのものが，言語運用能力の向上への一助になるのではないかと思われる．今後の教育学的研究で，指導の効果などを検証していくことが望ましい．

## ５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１ 件）

中浜優子(2013)「タスクの複雑さと言語運用（正確さ，複雑さ，談話の視点設定）との関連性」『第二言語としての日本語の習得研究』第 16 号 146-163.（編者 2 名による査読)

〔学会発表〕（計　３　件）

①Yuko Nakahama (2013). The use of discourse markers in L2 dialogic storytelling. A paper presented at Hawai'i International Conference on Education on January 6.

② Yuko Nakahama (2012). Does referent marking style transfer from L1 Japanese to L2 English? A paper presented at Hawai'i International Conference on Arts and Humanities on January 9.

③ Yuko Nakahama (2011). Co-constructing narratives in L2 conversation. A paper presented at Hawai'i International Conference on Education on January 5.

〔図書〕（計　１　件）

Yuko Nakahama. The effect of learning environment on L2 narrative discourse processes. In L. Pickering & V. Evans (Eds.) *Language in the Context of Communication: Studies in Honor of Andrea Tyler*. Cambridge University Press. （2016）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

## ６．研究組織

(1)研究代表者

中浜　優子（Nakahama Yuko）
慶應義塾大学・環境情報学部・教授

研究者番号：50343215

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：